慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マイネ・ウィータ・スキエンティアエ : わが少年期の智的生い立ちの記
Sub Title	Meine Vita Scientiae
Author	鈴木, 威(Suzuki, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 No.36 (2003. 3) ,p.124(1)- 120(5)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20030331-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マイネ・ウィータ・スキエンティアエ

——わが少年期の智的生い立ちの記——

鈴木　威

私を育ててくれ、あまつさえ三十数年の永きにわたって、他に取柄のない私に糊口の資を与えて下さったわが義塾から、ぎりぎり満期定年退職を迎えられることになって、私は内心ホッとしている。「ぎりぎり」というのは、十三年前の一九九〇年初夏、わが身の不徳から重い脳梗塞に当ってしまい、あやうく三途の河の大岩に足をかけたらグラッときたので驚きあわててこちら岸へ跳び返ってきたからよかったものの（これはその時実際に見た夢）、間一髪で定年まで十三年を残して退職通告を受けとるところだったという意味である。そうそう、義塾はさらに、私に素晴しい友人、先輩や同僚も与えて下さった。同僚の優しさと犠牲に守られて、大病後今まで満期定年をうめることが出来た私は、まこと、果報者と思える次第である。

さて、当引退記念号の紙面を借りて、ゲルマニストとしての私を育てて下さった恩師、先輩、同僚の皆様に御礼を申し述べるべきとも思うのだが、以前、当紀要第88号（「商学部独語三羽烏」の引退記念号）に、私が大学院で修業していた昭和三十年代の塾独文研究室事情を書かせていただいた折、縷々述べさせていただいているので今回はこれを省略し、これまで塾内では同僚にも開陳する機会のなかった、私が独文へ進路を定めるまでの智的遍歴について、少々お耳を汚させていただくことにする。

私の育った環境は、およそ学（スキエンティア）とは縁の遠い、歌舞伎座近隣のお茶屋育ちで、「尾張町交叉

点」から泰明小学校の間を名門音羽屋の御曹司らとつるんで遊んでいた粋筋のオヤジに育てられていたもんで、「齢いった女形が若づくりするためには化粧は紅を強く小さくさして唇の縁は厚めに沢山残すもんなんだよ」という話題が食卓をかこんで飛び交うような家庭で、食卓が片づけば、花道で六法踏んで大見得を切るような仕草を交ぜながら小さな話題をオーバーにカブきながら家族団欒をするような、そんな軟派な庶民の家庭に生をうけた。

そんな子供が、のちに、「勉強しに」大学院まで来るためには、少年期に出会った、今は亡き二人の恩師の影響が大きかったと、今日想い返すとつくづくこのお二人に感謝の情が湧いてくる。

昭和十八年春に「国民学校」へ入学した私が、空襲と戦後混乱に追われて、小学校だけでも何度か転校を重ねて五年生の折に出会った担任にK先生がいらした。高等師範出たての、今想えば新米の若造先生だったのかもしれないが、それをおぎなって余りある熱血度で、おだやかなうちにも、いたずら盛りのガキどもを黙らせる先生モティベーション豊かな「良い先生」だった。ある日の放課後、たまたま教室に居残って「卵が先か鶏が先か」で青スジ立てて議論していたわれわれガキンチョの横を通りかかったK先生は、「両方が同時に生まれた」と考えられないかとこともなげに仲裁してくれたのだが、午前中の理科の時間で「科学」とは「因果関係を考えることなんだよ」という禅問答のような話をされていたのを思い出して、「両方が同時に生まれる基盤」が気になってしようがなかった僕は、〔ここが素直じゃない小憎らしいガキだったのだが〕どうせこの質問には大先生でもマッスグに答えられまいとタカをくくって「そもそも宇宙の始まりは何なんですか」と質問してみたら、案に相違して、K先生はあっさりと、「『ロゴス』というものが宇宙の始まりらしいよ」と一言言い残すと、〔そこがカッコいいのだが〕すたこら立ち去ってしまわれた。答えをもらったようなもらわないような僕の方はこの「『ロゴス』って何?」という呪縛にその後半世紀にわたって悩まされることになるのだが、そんなことになろうと当の私自身もK先生の方も知る由もなかった。即ちアインシュタインの物理学で、宇宙は莫大な力だけ残して消滅する可能性があるらしい。ということは、力以外何もな

いところから多様な自然が生まれた可能性もある。しかし、「生まれる」ということは目的志向がなければなるまい。「空がすべてか?」とか「空が生産的だとは?」とか、後年『ファウスト』の「ロゴス」独訳に出会ってゲーテの宇宙論に取り組むまで、「ロゴス」は僕にとって禅思想の「生産的空」になったりライプニッツの「実体」になったり、ヘーゲルの「精神」になったり、こちらの成長に合わせるように、仮面をつけかえては僕の前に立ち現われた。K先生の「ロゴス」発言は、へんにグタグタ解説を施されなかったのが幸いして、返って少年の空想をかきたてる結果になってくれたと、事後処理の良さにも、今、大人(爺?)になってみて、感謝している。それにしても、今ふり返ってみて、よくも二十一、二歳の若さで、ハナたれ小僧相手にズバッと「ロゴス」などとのたまわれたものよと、教師としての資質に感心するのだが、K先生には当時本郷の大学でキリスト教ドグマ論を研究されていたお兄様がいらしたことから、K先生はひょっとしてこのお兄様からの耳学問で未消化のままヨハネ伝冒頭の一句を口ずさんだだけなのかもしれない(またまた素直でない爺の邪推?)。私がゲーテに行き当るのははるか後年のことになるが、実はすでに中学生時代、このK先生のお宅へ遊びに伺った折、ひょんなことから、当時学習院のゲルマニスト土井虎賀寿先生の『ゲーテとニーチェ』なる哲学概論書をプレゼントされ、何やらわからぬままツァラトゥストラだとか古典ワルプルギスだのの名前を覚えさせられることとなって、僕を後にゲルマニスティクに誘ってくれるターニングポイントになった想い出も懐しい。

このK先生からは得がたい教育術もおそわったことにもなり感謝している。というのも、「先生」というのは、たとえ生徒がどんなに未熟であったとしても決して教え方をレベルダウンをしてはならないし、たとえ自分の方も今日まだその奥義を極めていなかったとしてもこれぞ人類の誇れる叡智と考えられる思想は、こちらの熱気のさめないうちにこれをともかく生徒に伝授しておくべきだ、特に、自分が感激できてる思想があれば、感激できてる新鮮なうちに、先生は生徒に伝えておいてあげろ、という教訓、これである。私にはこのK先生体験があったればこそ、後年、初級ドイツ語文法を修めたてのヤワな学生に、マルクスの『経哲草稿』やヘーゲルの『精神

現象学』のような難解な原典を「講読」させる勇気がもてたような気がしている。

さて、少年期に出会った二人目の恩師は、当時新生の新制中学校時代、英語の補習授業をお願いしていたS先生である。S先生も塾の経済学部のOBで、当時は母校の県立横浜商業高校普通科の社会科の先生をしておられた。塾では平井新元学部長先生の許で、経済思想・学説史を学ばれて、学問的にも御趣味の点でもダンディズムの評判高かったその師の薫陶よろしきを得て、S先生御自身も、語学、学問、文化、御趣味、どの一点をとってもその蘊蓄すべて深く、多感な中学生の知的好奇心を満たしてくれて余りあった。学校の英語の補習はそこそこに、わが塾経済学部全盛期の伝説的教授陣、小泉信三、高橋誠一郎、野村兼太郎等々の話をことあるごとに話されて、ほっておけば理工系国立大学へ向ったであろう私を、私自身や親兄弟までも説得して下さって、出来て日の浅い慶応高校受験を実現させてくれたのがこのS先生であった。

「お前の伯母さんの歌舞伎座三味線と常磐津三味線との音色の違いはね……」などという話題の飛び交う家庭の子弟が、河合栄治郎、阿部次郎、倉田百三、萩原朔太郎の青春必読書から、西田幾太郎、田辺元、三木清等の本格的哲学書まで、旧制高校的雰囲気の勉学習慣へ引き寄せて下さったのがこのS先生だった。

英語、ドイツ語は勿論、モノにならなかったが、フラ語からラテン語まで、またスミス、リカード、ミル、マルサスから河上肇の社会主義まで幅広く活字文化に慣れさせていただいたお蔭で、その後、塾高を経て経済学部へ進んだあとも、日吉教養課程では「語学と哲学と過去五百年の西欧史とさらに余裕あれば文学を真面目に学んでおきなさい」というS先生の御忠告は、のちに専門課程で思想家マルクスとルカーチのヘーゲルを、また大学院は独文に転科してニーチェ、ゲーテ及びハイデッガーを勉強するための大いなる基礎体力作りとなった。因みにこのS先生は、御自身、その後再び塾の大学院英文科でイギリス学をブラシアップされて、いっとき日吉の商学部英語科で教壇に立たれ、引退されてからほどなく鬼籍に入られてしまったが、御長男さんがS先生の夢をつながれて、今では三田の哲学科の中堅として近年目ざましい活躍をされているのは、S先生の薫陶を受けた私と

しても嬉しい限りである。

私はS先生の忠告はわりによく守った方の弟子だとの自負があるが、唯一、近世哲学の祖、デカルトとカントの形而上学にはついてゆけず、「よく勉強しておきなさいよ」という御進言につい従えず、もっと手っとり早い、日々頭の蠅を追うような息の短い勉強にしか手をそめなかったことが、長年シュレヒテスゲヴィッセンとなってきたが、いよいよこの春からはメリーヴァケーションが手に入りそうなので、学生時代、一日十行しか進めずに挫折したデカルトから、ルター、ライプニッツの近世哲学でも毎日数行ずつ繙こうかと「うまし夢」を見つつ、今この拙文をつづっている。今後とも、道ですれちがったら「ターハ」くらいの御挨拶は下さい。お元気で！